

日本人と為替レート



オックスフォード・エコノミクス
在日代表

長 井 滋 人

私が日本銀行に入行した1986年以降の日本経済の歩みを振り返ると、一貫して為替レートの動きに翻弄されてきた感が強い。日銀の金融政策の反応関数の最重要パラメータも為替レートであり続けてきた。為替を政策目標にしてきたという意味ではなく、円が大きく動いた時に政策対応をしがちであったということだ。金融バブルの原因の一つになった低金利政策はプラザ合意以降の円高への対応であったし、いわゆる「失われた20年」における政策対応もトリガーは多くの場合、為替の変動であった。

この事は必ずしも円の動きが日本経済へ与える影響が常にそれだけ重要であったことを意味する訳ではない。為替レートが実際に生活やビジネスにどの程度影響したかにかかわらず、国民全体が円の動きに常に過大なまでの関心を持ち、それが故に政治家も官僚も対応せざるを得なかったということだ。こうした国を挙げた為替レートへの関心の高さは他国に類を見ないが、それ以外にも日本人の持つ為替レート観には以下のような三つの特徴的な志向があるように思う。

一つは過度の「円安志向」だ。円高になった場合の経済への影響は様々で、輸出業者が嘆くのは当然としても、輸入業者や海外旅行をする人は